

2025年度文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」
『障害者の移行期の学びのモデル構築』

ゆめ・やりたいこと実現センター8年の軌跡 学び合う そして 創り合う



ゆめ・やりたいこと実現センター
社会福祉法人一麦会（麦の郷）

目 次

ゆめやりのめざすところ & 2025 年度活動実績	2
ゆめやり座談会	7
連携協議会委員からのメッセージ	17

《ゆめやりのめざすもの》

障害のある人や様々な困難を抱える人などの『生きる』と『活きる』を膨らませて、「ゆめ」や「やりたいこと」を参加者と一緒に実現していきます。また、「生きる（衣・食・住・働）」が保障されるだけでなく、「活きる（学び・活動・役割）」が保障されることを目指しています。



夕刻のたまり場

ゆっくりしたり話したり
講座で学んだりできる場所
第2・第4土曜日 16時～19時
(場所：山崎邸)



やりたいこと講座

「興味はあるけどしたことがない」「やってみたいけどひとりではむずかしい」
そんな「やってみたい！」を出し合って実現していく



つぶやきサポート

くちや困り事、うれしいことを共有できる場
支援者や被支援者の関係ではなく、共に生きる“なかま”として受けとめ、分かち合う



人材バンク・ゆめやりメイト

地域には生涯学習のサポーターがいっぱい！「こんなことができます！」を募り人材バンクに登録。「教える」のではなく、「一緒に」を大切に人材発信の拠点に！
ゆめやりメイトが夕刻のたまり場・講座等の活動をサポート

《2025年度活動実績》

＜夕刻のたまり場＞ 第2・4水曜日 16:00 から 19:00 開所

2026年2月末まで 21回開催 平均参加人数：14.6人 のべ参加者数：306人

ゆめやりメイト（ボランティア）：2.0名

＜やりたいこと講座＞

＜ 13講座 延べ参加人数 186名＞

会場：紀の川市 10回、和歌山市 3回

講座名	日時	主催・協働	会場	人数
1 ウクレレの音色を楽しもう 講師：福島和成さん	2025. 5. 30 (金) 16:30～17:30	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市 打田公民館	6 名
2 和太鼓に挑戦してみよう① 講師：峯本雄貴さん	2025. 8. 10 (日) 13:30～14:30	ゆめ・やりたいこと実現センター 峯本太鼓教室	紀の川市 打田公民館	6 名
3 和太鼓に挑戦してみよう② 講師：峯本雄貴さん	2025. 8. 24 (日) 13:30～14:31	ゆめ・やりたいこと実現センター 峯本太鼓教室	紀の川市 打田公民館	6 名
4 出張ウクレレ講座 講師：福島和成さん＋三木将矢さん	2025.9.5(金) 16:15～17:15	ゆめ・やりたいこと実現センター むぎたぶ・紀の川市協力隊	紀の川市 メリーズハウス	25 名
5 和太鼓に挑戦してみよう③ 講師：峯本雄貴さん	2025. 9. 7 (日) 13:30～14:31	ゆめ・やりたいこと実現センター 峯本太鼓教室	紀の川市 打田公民館	6 名
6 チャレンジ！ピアノ 講師：クレア・ピアノ	2025. 9. 21 (日) 13:30～14:30	ゆめ・やりたいこと実現センター クレア・ピアノ	紀の川市 紀の川市役所	9 名
7 採れたて野菜を奈良漬けにしよう 講師：農家の牧子さん	2025. 10. 12 (日) 10:00～12:00	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川市地域おこし協力隊	紀の川市 藤井地区	6 名
8 出張ウクレレ講座 講師：福島和成さん＋三木将矢さん	2025.10.13(月・祝) 11:00～12:00	ゆめ・やりたいこと実現センター クリエイターズ	和歌山市	7 名
9 からだを楽しく動かそう 講師：三浦さち子さん	2025. 11.18 (火) 13:30～14:30	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市 山崎邸	8 名
10 漫才に挑戦しよう！ 講師：ヤングさん	2025. 12. 3 (水) 17:00～18:00	ゆめ・やりたいこと実現センター	紀の川市 山崎邸	9 名
11 出張ウクレレ講座 講師：三木将矢さん＋山畑瑠平さん	2025. 12. 12 (金) 13:30～14:00	ゆめ・やりたいこと実現センター 和歌山生活支援センター	和歌山市	16 名
12 出張ウクレレ講座 講師：三木将矢さん＋山畑瑠平さん	2025. 12. 24 (水) 9:45～10:15	ゆめ・やりたいこと実現センター 第2こじか園	和歌山市 第2こじか園	60 名
13 漫才に挑戦しよう！ 講師：ヤングさん	2026. 3. 1 (日) 17:00～18:00	ゆめ・やりたいこと実現センター 紀の川フルーツツーリズム	紀の川市 山崎邸	22 名

＜共に学び、生きる共生社会コンファレンス＞

これまでコンファレンスを開催してきましたが、和歌山県南部の取り組みを発信する機会が少なかったため、今回は南部の事業所を中心に発表していただき、また、来年度和歌山県がコンソーシアムを創出する助走になるコンファレンスを目指し開催しました。

【開催日】2025年12月22日（月）10:30～15:40

【開催場所】田辺スポーツパーク

【共催】文部科学省、和歌山県教育委員会、社会福祉法人一麦会、

※オンライン配信、手話通訳の方々にお願いいただきました。

【参加者】76名



1部動画



2部動画

【共催】文部科学省、和歌山県教育委員会、社会福祉法人一麦会

共に学び、生きる共生社会コンファレンス ～学び合うそして創り合う～

障害のある人や家族、学びの支援者、社会教育関係者、
障害者の学びに関心のある人など、どなたでもご参加ください！

障害のある人の生涯学習の意義や実
践を聞き、障害のある人・ない人も、
一緒にやりたいこと・学びたいこと
を実現できる地域を目指して何がで
きるのか、みんなで考えませんか？

開催日 2025年 12月22日
10:30～15:30
開催場所 田辺スポーツパーク
多目的ホール
和歌山県田辺市上の山2-2 22番1-1号

10:30-12:00

オープニング 田辺市立 田辺市立ホール
（開会式・開会式後援会・パレード）
和歌山県立文化センター（和歌山県立文化センター）

12:00-13:00

～共に学び、つながり、創り出す
シンポジウム＆ワークショップ～

基調講演
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター

13:00-15:30

～共に学び、つながり、創り出す
シンポジウム＆ワークショップ～

基調講演
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター
和歌山県立文化センター

【申込み・問い合わせ】
申込方法：各のQRコードからお申し込みください。
申込期限：2025年12月15日（月）17:00迄
社会福祉法人一麦会（和歌山）ゆめやりメイト、メンバーが登壇し報告
Tel:0736-60-8233 Email:yumeyarikoto.center@gmail.com



＜出演＞

- ・5月31日（土）つくし医療・福祉センター「スペシャルコンサート」にて
ウクレレ演奏
- ・9月27日（土）障害者・市民の夏祭り ウクレレで出演
- ・11月2日（日）紀の川市文化祭に、ウクレレ・和太鼓で出演
- ・12月6日（土）から8日（月）広がれアート展にて、岩出市公民館講座で制作した「段
ボールアート」を展示
- ・12月6日（土）広がれフェスタステージ発表にてウクレレ演奏

＜講演＞

- ・8月2日（土）紀の川市生涯学習課主催「じんけん学習講座」
ゆめやり紹介報告＆「知的発達障害疑似体験」講師をメンバー三木将矢さんが務める
- ・11月19日（水）和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム
県生涯学習課、紀の川市生涯学習課、講師、ゆめやりメイト、メンバーが登壇し報告
- ・11月20日（日）シチズンシップ共有企画 シティズンシップ教育セミナーにて報告

ゆめ・やりたいこと実現センターの活動について～「ゆめ」や「やりたいこと」を実現する場づくり～

ゆめ・やりたいこと実現センター
コーディネーター 尾方千春

「ゆめ・やりたいこと実現センター」は、文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」を受託し、2018年8月より活動をスタートさせました。障害のある人が学校を卒業してからも、好きなことや得意なことを新しく見つけながら、それぞれの「ゆめ」や「やりたいこと」を実現できるようにサポートをしています。「学び合い」そして「創り合う」をテーマに、様々な障害のある当事者が自分の人生の主人公になるよう、「やりたいことを（提案・企画・実現！）みんなで創る活動」として、①夕刻のたまり場（居場所）、②やりたいこと講座、③つぶやきサポート、④逸材発掘・人材バンクの4つを大きな柱にして活動をしています。

地域でも生涯学習の機会は多くあるものの、障害のある人は生涯学習の機会が少ないという現状があります。今まで生涯学習に関わりのなかったところと一緒に、この事業を通じて障害のある人の活動を広げていくことも重要だと考え取り組みをしています。

「ゆめ・やりたいこと実現センター」の実践

私たちの拠点となっているのは、JR 和歌山線粉河駅前にある山崎家住宅（2020年7月に国登録有形文化財（建造物）に登録。およそ築100年以上の古民家）です。懐かしさや温もりを感じる古民家で、第2・4水曜日16時～19時に「①夕刻のたまり場」をオープンしています。2018年10月から開設した「夕刻のたまり場」の当初の参加者はたったの3名。しかし、だんだんと参加者が増え定着してしたこともあり、平均14.8名（2025年11月末現在）の参加者が来られています。ある参加者は、「人としゃべりたい」「障害のある人と悩みを共有したい」と深く思っていました。このたまり場ができたことで、みんなで食べたり、飲んだり、話したり、ゆっくりできる居場所が増え、「自分一人だけで悩んでいたのではなかった」。この心の気づきによってなかと不安や悩みを共有（③つぶやきサポート）し、友情を育む大切な場になったと言います。

また、障害のある人のニーズを聞きながら「②やりたいこと講座」（漫才、俳句を楽しもう、ウクレレ、龍門山登山、和太鼓講座など）を多種多様な内容で企画し開催しています。7年間講座開催をして188講座/のべ3,015名参加がありました。生涯学習の活動をしている地元の講師、団体、ゆめ・やりたいこと実現センター連携協議会委員とで、「こんなことしたい」「あんなこと勉強したい」など障害のある人のひたむきな思いに寄り添い、そして「みんなと学び合いたい」という講師の熱意をつなぎながら、それぞれの願いや夢が実現する講座をみんなで創っています。（④逸材発掘・人材バンク（登

録者：181名/講座数257講座）2025年11月末現在）講師との新しい出会いや学びがあったことで、参加者からは、「もっと知りたい」、「僕も講師のお手伝いができそう」、「習ったこと・自分が経験したことをみんなに披露したい」など、前向きな気持ちが生まれています。そして、日常生活でも自ら挑戦しよう！という自信にもなっています。

ゆめやりの活動の広がりこれから

2021年12月（活動3年目）、とても嬉しいニュースが飛び込みました。一麦会が障害者の生涯学習支援活動に対する文部科学大臣表彰に選ばれ、県内で初めての表彰をされました。大変驚きましたが、ゆめやり職員の努力だけでこのような賞をいただいたとは思っていません。「ほっとけやん」「なんとかならんか？」と、さまざまな障害のある人たちが地域で安心して豊かに暮らすために、約50年前から手弁当で事業を立ち上げた当時の職員の熱い意思がこの賞につながったと思っています。そして、その先人の強い思いを引き継ぐためにも、障害のある人たちの楽しく活動する様子を共有し、生涯学習を地域に広げられるよう、和歌山県内の教育委員会（田辺市、岩出市、新宮市、かつらぎ町、湯浅町、有田市、海南市）を、当時のコーディネーターの藤本綾子さんと連携協議会委員の山崎由可里さん（和歌山大学教育学部学部長）、一麦会理事 田中秀樹とともに訪問させていただきました。大変ありがたいことに、岩出市では2023年度から、かつらぎ町では2024年度から、それぞれの公民館で障害のある人の講座が開設されました。岩出市生涯学習課の職員の方は、「講座を開設すると、『楽しかった』『支援学校の友達ともあえて嬉しかった』など、心温まる感想や参加者の明るい笑顔が多かった。これからももっと講座を増やしたい」と、やりがいを感じる仕事へと変化したようでした。（ゆめやりの拠点となっている紀の川市でも2022年度から公民館講座が2つの公民館で開設。現在では紀の川市内全5公民館で熱く心のこもったご理解とご協力をいただきながら開催されています。詳しくは、紀の川市生涯学習課からの報告をご覧ください。）



障害のある人の気持ちや活動を伝え、発信するために制作した2020年度の成果物

←左：「あがらかるた」

↓下：「取扱説明書」

ゆめやり座談会

2025年12月上旬、「ゆめやり座談会@山崎邸」を開催しました。参加してくれたのは、ゆめやりメンバー三木将矢さん・前田三津子さん・馬淵俊行さん・宮本あかねさん・山畑項平さん、ゆめやりメイトの藤本綾子さん、夕刻のたまり場のことやみんなの思っていることをオープンにお話ししました。そして、この日は和歌山県社会福祉課の新解美紀さんがゆめやりの活動に初めてお越しになり、みんなの気持ちを共有する会になりました。

三木将矢（以後 三木）：まずは、僕から。三木将矢と申します。なんという肩書を持ち合わせてないんですが。そうやな。ゆめやりの活動が八年間あるうちの、だいたい二年目ぐらいから利用しています。和歌山市で本業というか普通の仕事は介護をやってるんだけど。ここにね、携わらせていただく機会が増えて。ここで、なんか（笑）。あの呼んでいただける機会が多くなってきて。まあ、今日みたいな活動にもこういうふうに、なんかちょっと増えてきたなぁという感じで。よろしくお願いします。

三木：まあ、実は自分も障害があって、30歳くらいの時に発達障害があると診断されて。「あーそうか」と腑に落ちた後は、それまではいろんな仕事を転々としてるんですが、同じ仕事を続けています。まあよかったかなと。

藤本綾子（以後 藤本）：ちょっとだけ口出しさせてもらってもいいですか。彼のことすごいなぁと思うことがたくさんあるんやけれども。一番最初、おばあちゃんがね、キセキの杜でお話をさせてもらう機会があって。その時にね、おばあちゃんが熱心そこで家族会に参加されてて。「いやー。気になる。ええわ」っていうふうに思ってくれたらしくって。すぐにあの三木さんを最初一緒におばあちゃんと一緒に来てくれたんだっけ？

三木：まああの時は言うてくれただけ。チラシで紹介はしてくれた。

藤本：それからもうすぐに、和歌山市内から遠いのにすぐにこっち来てくれて。私すごく嬉しくて。今はきっとみんなも思ってくれていると思いますが、この参加されている人たちの中のリーダーというか、なんかこう、頼りになる存在になっているよなど。癒し系だったり、もりあげてくれたり、彼はほんまにリーダー的に発信してくれるなーと。そんな存在だなと。

三木：でもそのこういう場じゃないところの集まりがあるけど、別に僕リーダーでもなんでもないです（笑）僕のポジションって思ってたのは一番下っ端の、まあなんか頼りにしてくれてるなって思うことが、最近あるなとは思ってますね。

藤本：頼りにしてくれてるなっていうふうに思うことは、本人にとっては、どんなん？三木さんにとってはどう？

三木：まあ悪い気はせんけども。

一同：笑

三木：まあね。僕の範囲外のことはあるから。他のみんなの方が詳しかったり。実質なんか、こんなリーダーと言ってくれてるけど、やってることなんて、大したことはないはね。それっぽい柱にはなっているかもしれないけど。見えるだけでね。

藤本：なんか安心できるわな。三木さん。

三木：メンバーがなんか困りごとなんかあった時言ってくれる。それで僕が黙って聞いたみたいなことが多いんですけど。

藤本：安心できるんやろうなぁ。

三木：はい、そんな場になってきましたな（笑）じゃあお次の方。

山畑項平（以後 山畑）：緊張する（笑）ちょっと待って。

藤本：緊張なんかしてないと思うけど（笑）元気に喋ってたやん。

山畑：そう。何から言うたらいいかわからん。

宮本あかね（以降 宮本）自分の名前や。

三木：名前からいこうか。

藤本：いいこと言うね。大当たりや。どうぞ。

三木：あなたのお名前は？

山畑：ゆめ・やりたいこと実現センターの山畑項平と申します。メンバーです。去年の四月から岩出市の福祉事業所で働いています。椎茸の袋詰めや内職作業をしています。

三木：で、あのどこに住んでるんですか？

藤本：そこよ。さあさあ、どうぞ。

山畑：この10月から打田のグループホームで住んでいます。

三木：グループホームで住みだしたわけだ。

山畑：そう。

三木：それで、何をやっているの？

藤本：三木さんも関わってくれてるんやんな？

山畑：近くの。どういったらいいん？

三木：近くのまあほぼ耕作放棄の畑があって。

藤本：グループホームの横側の？

山畑：畑あるのよ。

三木：ゆめやりメイトの具路さんが隣の方に聞いてきてくれて。手があったら手伝ってくれませんか？
ということで使えることになったんだけど。

藤本：すごい。

三木：一緒に山畑くんとやっている。もしこれからそのグループホームに入ってきたりすると、水やりしたりとか収穫できる環境ができたらいいなあと。人数欲しいですね、っていう感じ。

藤本：グループホームのメンバーも募集できたらいいよな。

馬淵俊行（以後 馬淵）：えっ、募集してんの？

宮本：えっと、今気づいたんかい（笑）。

山畑：そう。

宮本：では次の方。

全員：はい、どうぞ。

馬淵：えっと。馬淵俊行です。福祉事業所で仕事をしています。本業は、ゴミの回収袋の納品とそれと並行して業務用のゴミ袋の大きな塊の上げ下げをしています。

藤本：あれ？あっ。重いん違う？

馬淵：うん。ハンドリフトであげたやつを移し替えてるんですよ。

藤本：見学させてもらったことある。あそこにいるんや。どの部署かなと思ってた。

馬淵：主に僕の仕事はほとんど回収袋の納品がほとんど。紀南の方まで納品でいった。

藤本：遠いなあ。どこ？田辺まで行った？

馬淵：有田。

藤本：いろんなそれぞれの市町村の袋があるから。すごいな。

宮本：すごいなあ。

馬淵：今のところは紀の川市がほとんど多くて。

三木：良かったな。近くてな。

藤本：今の福祉事業所に行きだして何年くらい？いつから？

馬淵：もう僕は入った時、お箸の袋詰めを最初やりだして、飲食店のお箸から最初やりだして。

藤本：それが何歳くらいだった？

馬淵：もうだいぶ経つ。支援学校卒業してから。お掃除のところも行って。今の事業所に行って、これ運んでよとかこっち行ってよとか。みんなに慕われるようになって。

三木：もう何年になる？

馬淵：だいぶもうかな。

山畑：50年ぶりすごい。

馬淵：50年ぶり？なんでやねん（笑）。

藤本：やっぱすごい頑張ってるなあ。

馬淵：以前お世話になっていた職員が去年の四月に別の事業所に行って。今年の四月からちょっと新しい職員女の職員が増えて。にぎやかになってよかった。

藤本：すごい。すごい。その移動になった職員さんといっしょに来てもらったんですね。馬淵：そう。最初ね。

藤本：その職員さんが、なかなか人との関わりが難しいので、ぜひこういういろんな人と集えるところへと。馬淵さんと一緒にそこで共に過ごしてほしいんや、っていうことで。一番最初に連れてきてくれてね。なかなかコミュニケーションも取りにくいしで。

三木：パッて入ってな。僕も仲間に入れてって。まるでお話しできなかったんですね。

藤本：馬淵さん、変化したと自分で思いませんか？

馬淵：ゆめやりに入ってから、今藤本さんが言ってたんやけど、前は僕、人とお話しするときにあんまりなかった。

三木：なかったんやな。

馬淵：人とあまりこう、みんなと、グループホームではあんまり喋れへんけど。ここやったらちょっと気兼ねなく。

藤本：そうなんだ。すごいね。「気兼ねしなくて」って、その話嬉しいわ。

馬淵：理事長に頼んで外出したいなと思って。

藤本：あ、そうだったんだ。

三木：ほかのメンバーも毎回言うわ。「辞めるのも、自分で決めたらええ」って。自分でやっぱり決めたらええ。障害があって作業所に行っていたら、自分で決められへん。嫌なことがあっても。生活はあるけど、こんな仕事辞めたら言うて辞めたらええんやけども。なんか辞める。っていう。選択肢がもうないんだ。

藤本：今日感動したのが馬淵さんが、自分の今までしんどかったこととか、そんなことを今の自分の言葉で言えるってすごい？！辛いことって誰にもあったりするんやけど。苦しいことを話できる相手とか、その例えば支援員さんに伝えるとか、それもなかなか難しかったと思うのよ。怖い、言うたらなんか悪いのかなあ？とか、それをこの場で言えるっていうのは。馬淵さんの言葉でもちゃんと伝わったよ。

宮本あかね（以後 宮本）：メグリュックの宮本あかねです。よろしくお願いします。

仕事では、さをり織りをしたり、組み紐をしたり、スマホのストラップを作ったりしています。※メグリュック：麦の郷の法人の一つ。

職員（尾方）：たまり場はいつから来てるんだろう。

宮本：えー。そうですね。たまり場が始まったぐらいから来てますよね。

藤本：どのくらい。

職員（尾方）：8年目なんでどのぐらいかな？同じぐらい来てますね。

宮本：そうね。

職員（尾方）：まあ毎回来て何してるんですか？。

宮本：中国ドラマがすごい好きで。イケメン好き。あ。これこれ。この中国ドラマの時代で。（笑）仕事場でもイヤホンしてテンション高めるために仕事ができやすいように。

DVD プレーヤーでイヤホンで聞きながら仕事してる。やっぱり、はかどります（笑）。そんな仕事中は見るんじゃないかって、それでこう、すごい聞きながら。でも疲れたなと思ったらもう。もうイケメンからエネルギーをもらう。

藤本：素晴らしいな。

職員（尾方）：あかねちゃん、ゆめやりで頑張ったことがありますか？

宮本：頑張ったことをたくさんあるけど。まあ、いくつか。二つぐらい。

まずは、ダンス講座。ここ（山崎邸）でもやりました。楽しかったね。それもう三年ぐらい講師と連絡を取ったりなど、アシスタントをしています。それから、和太鼓を練習しているんです。今度のコンファレンス（12月22日）で演奏します！田辺市までいきます！

藤本：紀の川市で応援してるわよ。（笑）

宮本：あと、青洲まつり時代行列に出演しました。加恵の妹役です。華岡青洲の妻の妹役です。紀の川市の職員の人たちもサポートしてくれました。

藤本：着物似合っているよな。歩くの大変じゃなかった？

宮本：今年はめちゃめちゃ雨降った。着物も雨で濡れた。でも、バスで送ってくれた。

来年は加恵さんを狙いたいです！白いの着たくて！（笑）

前田三津子（以降 前田）：すごいね。グレードアップして。すごいね。

藤本：応援してますね。

宮本：ゆめやりでいろいろ挑戦できたり、太鼓では新しい先生との出会いもあって。

前田：よかったね。頑張ってきてください。

宮本：はい。（笑）

宮本：そういえば、明日漫才講座にお父さんも来ます。一緒に行って笑ってきたらとお母さんに言われたの。普段は家ではリモートワークしてるんでね。気分転換にと。

藤本：お父さんも一緒にいいね。誘ってくれて嬉しい。

宮本：見るだけやけど、やらないよ。（笑）

藤本：それにしても、ほんまお母さんもお父さんもずっと迎えに来てくれて。ありがたいよなあ。

宮本：はい。じゃあもう帰りますね。（笑）

一同：バイバイ。

新解美紀さん（以後 新解）：県の職員です。

馬淵：県庁ってあの和歌山今なんか。有名なこう。観光のアピールとかしてますか？

新解：（馬淵さん）すごい！よく知っていますね。観光（聖地リゾート）のアピールをやっています。

藤本：和歌山にはいいところいっぱいあるよな。

三木：熊野古道とか高野山とか？

馬淵：そうそう。なんか知事さんが変わったってことニュースで言ってたけど。

新解：前の知事。亡くなったんです。

藤本：そうや。突然もうびっくりしたなあ。

新解：すごい福祉に力入れて思いを持ってくれていた人でした。いろいろな事業所に行ってくれていた。

全国のスポーツ大会で県の実績があるんですが、亡くなった知事は団長になってくれて。いつも一緒に二年間行ってくれた。

藤本：すごい。目線が共にっていう感じでしたね。

新解：今の知事は県の元教育長で、その前は知事室長とかされていました。やっぱり教育長もしていってらっしゃったので、支援学校のことは詳しいです。

山畑：どこの支援学校行ってたんですか？

新解：県内全部の支援学校です。教育長の時に、南紀はまゆう支援っていうすごい学校も作ってくれて。仕事は県内の福祉事業所とかかわる仕事をしています。よろしくお願いします。

藤本：藤本綾子です。ゆめやりメイトとして参加しています。そもそも、私は一番最初八年前この事業がスタートしたときに担当になってやってきたんやけども。「何をするのかなあ？どんなことしたらいいんやろう？」と思って。それこそ一番最初三木さんとかね。ほんまに初期に来てくれたことで、あの一人で考えなくてもいい。なんかこう何か（自分が）支援をする側で、（メンバーが）支援される側ではなくってね。作業所だったりとかあの支援センターじゃなくって、ここはね、ほんまにこう平たい場所だしで、私も何してこれからどんなにしていって、ここの場がいい空間になるのかなと思っていて。でそこへ三木さんたちが参加してくれることで、で、またあの尾方さんが帰りにここへ立ち寄ってくれて、一緒にご飯を作ったりとか。そんな中でね。なんかすごい。私も何かしなければならいではなくってね。なんか。いや、みんなとできるやん。って。で、なんかすごい良い場所やな。こんな、こういう居心地のいい場所にみんな来てもらえたら嬉しいなというのが一番最初の安心感で。「一人じゃないんだ」っていうのをすごく感じて。嬉しいことに、あのそれこそ。県の担当者も紀の川市の担当者もすごく結構それぞれの立場で応援してくれて。それが一番ね。すごい嬉しいかったのを覚えています。私もすごくそれで、なんか担当がたった一人でもね。一人じゃないっていうのを思えたのがすごく嬉しかったなあっていうのを思いだして、でね。今は気楽にね、来たいときに来るっていうことにしてんのよ。

藤本：別の話になるけど、あの支援センターで勤務していた時とか、その職員の時はね、「誰々ちゃん」とかではなく、絶対「誰々さん」と呼んでいたんやけど、ここではねそれこそ「あかねちゃん」とかそういうふうな平たい関係やん。なんかそういうね、今まで支援さんセンターにいたなかでなかったからね。なんかすごくそれが新鮮でもあるし、「同じ立場で」「一緒に」。っていうのがね。すごく嬉しいし。仕事辞めてからでも、ここに来れないこともあったりするんやけどね。なんかねそんな時はね。絶対にみんなどうしてるやろ？ってつい思ったりもする。行ける場所が私もあるっていう。やっぱすごく私も嬉しい場所であります。

職員（尾方）：家族とか作業所とは、たまり場は何が違うのでしょうか？

三木：まあでも家族、作業所。まあ学校は、誰かの意向に沿わなければならないというのが一つ出てくる。親、先生、お友達の意向。まあ同僚、先輩がっていうのがあると思うね。ここでは、まあ、基本的かなと。自由な場所。

僕がその学生時代の時思うと、やっぱりその。ほんま家でいてたら、「なんで家でいてるの？」学校に出たら、あんまり楽しくない。勉強とかしんどかった。家に帰ったらいろいろ家の人に言われるってなったら、もうほんまに行く場所がないってなるんやけど。そういう時にこういう場所があれば、通うようになってたらしいし。息詰まるやろうなと思いますよ。何もそういう場所はないと。そういう時期あったからねー。

藤本：三木さんの話で言うとね。なかなかその発達障害っていうことをきちんとか明らかなになったっていうのが、30歳ぐらいや。でね。それまで、なんで自分はこうなんやろとか？すごくこう責めたり

とか、人とは違う。何でやろう？っていう。動いてばかりで、ガサガサするなよっていうふうに幼稚園から高校時代も注意されたりとか。ちゃんと聞かなあかんやんとか言われる中で、障害とも認定されずしんどい思いをしてきたはず。

三木：ずっとね、なんで、よその子ができて、僕はできへんの一？とずっと思っていた。

藤本：それね、高校の時に苦しかったっていう話を聞いてね。それがね、30歳で(自分の障害が)分かって。やっとそれからどう変わったのかな？

三木：それは変わるよー。よかったーと思った。ほんまに。これで。ほんまに。ただそういう能力のない人ですよって言われた時はどうしたもんかと思ったけど。今では知的・発達障害疑似体験の講師とかまでさせてもらってね。70人ぐらい来てくれたんかなと思う。

藤本：私、三木さんと前にも一緒に講師をさせてもらったら、なんか、私はすごく楽というかすごくええ。相棒っていうかね。そうそいい話してくれるような。

三木：自分の体験もあるんで。自分で気づく人は珍しい。そうやなあ。これまあ最初に認定されるかもう死ぬまでわからん人もいる。30歳まできて気が付く方が珍しい。まあほんでどっちか分からずに。というか認定まで変わってるところがあったりとか、なんか。いっぱいいてると思うんですよ。そういう人のために。そういう人の道しるべになるんじゃないけど、そこまでええことは言われへんけど(笑)。というのが頑張れるように、ちょっと、こういうアドバイスはありますよとかいう話は伝えていきたいなど。

藤本：あー素晴らしいわなー。

三木：三木さんみたいになりたいとか言ってくれた人がいた。うちの孫も三木さんみたいになれるか？と言ってくれた。

藤本：勇気づけられたと思うのね。

三木：嬉しかったね

職員(尾方)：では、仕事帰りにご参加ありがとうございます！自己紹介をお願いします。

前田：メンバーの前田三津子です。

藤本：前田さんがきてくれただけで安心。めっちゃいいわ。

前田：うーん。若い人が多いから。また母親みたいなよな。(笑)

前田：今年奈良漬け作りの講座(紀の川市地域おこし協力隊との共催講座)と芋ほりをやりましたよね。

三木：奈良漬けな。

前田：楽しかったですねー。奈良漬け作りなんて、一回もしたことなかったけれども丁寧に教えてくれて楽しかったです。藤井地区の農家さんの畑を借りてテーブルに材料をそろえてもらって。一ヶ月で食べてみたけど、やっぱり美味しくなかったね。地域の農家さんが作って出してもらったのとはやっぱり違う。ナスとか味が馴染んだやつとは違った。ちょっと時間かかるかもしれない。

浅漬けじゃないけど、好きな人もいてるし。でも。お正月頃かなと。ちょっと楽しめますね。でも一ヶ月で食べれるって言ってたけど、三ヶ月ぐらいおいたほうが、やっぱりおいしいみたい。

藤本：前田さんが来てくれたらね。なんかみんな安心感あるよ。みんなの悩みの相談を聞いてもらっているし。

前田：お母さんでしょ？そんな存在？(笑)

藤本：なんか前田さんの存在もね、みんなほっこりする。何でも聞いてもらえる人っていう感じで、すごく安心感あるよ。

前田：そうですか。私も最近ちょっと来させてもらってないけど。でも、なんかみんなと出ていろんな話聞いたりとかすると、安心するなみたいな。私も安心するなってなっている。

藤本：私も絶対無理せんといこうと思ってて。自分の家族のこととかあるから、無理してきたらアカンなと思ってるの。なんかすごく、今日行きたいなとかってすごく思うわ。みんなと過ごしたらなんか元気をもらえるというかね。

ここのこういう空間に癒されたりとか。だからそういう場所ってすごく大事なよな。

前田：そう、大事です。私は一人で生活していますが、ここに来て、たわいもない話を聞いてて、面白いとか。こういう居場所っていいですよね。

藤本：こんな雰囲気。いいよな。

職員（尾方）：参加してくれるメンバー、ゆめやりメイト、みんなのおかげでね。いろんな人たちがいい変化をしてきたと思います。

藤本：馬淵さんもね、成功事例っていうかと思ってるんだけど。本当に変わった！自分で判断して動けるようになったよな。

前田：最初来たときどうしよう？と困った。

藤本：やっぱりそうですよね。言われて動くことが良しとしてたんだけども。それがそうじゃなくなって自分で動いたらいいなっていうふうに。変わってきた。

前田：変わってきてる。この前高野山に行くのに電車の時間とか調べてくれたり。

藤本：それはすごい変わったのがやっぱり聞いて、すごい。

前田：すごい自信がついたと思う。

藤本：それはあるかもね。役割あるんだっていう。前田さんがね、来てくれると安心感あるし。

前田：ありがとう。

山畑：嬉しい。(笑)

職員（尾方）：公民館のお料理講座の時とかね、前田さんは山畑君のことを助けてくれましたよね！

前田：そういうのもあったな。(笑)

前田：当初のことを思ったら紀の川市公民館の講座も増えてるし、障害がある人もなんか社会に参加していけてるって感じがすごく思う。

藤本：公民館講座が普通に広報きのかわなどに載っていて。「障害のある人対象」とか書いてくれてたりして嬉しいよな。

前田：そうそう。なんかねえ、今までちょっとハードルがあったっていうか。障害のある人が参加できる講座が増えて嬉しい。

藤本：紀の川市が協力的なことって嬉しいよな。受け入れてもらっているというか。

三木：料理がまたここでもやりたいっていうのは、ヤククン（ほかのメンバー）がこの前言っていた。

前田：ああ。よかった。みんなで作って。

藤本：かつてね、数年前にしていたように、みんなで食卓を囲んで食べるっていうのもコロナ前はやっていたけど。でもね、あの時実はすごく大変で。やっぱり作るのは、たとえカレーって簡単にできそうやけども。作るだけじゃなくて。片付けもね、ちゃんとしなくてはいけなくて。「大きな家族みたいや」という表現をされた人がいましたが、スタッフも少ない中でね。そこまでっていうのが大変だった。

三木：講座で料理講座とかあったらいいな。うちのその畑で、もし何か採れたらそれを使ってなんかやりたいなとずっと思っていて。これを今日標にじゃがいもを育てています。

藤本：いいな。

三木：これをやるのに、一生懸命。水やりとかそんなことは別にだいぶ大きくなった。

藤本：なんか楽しみやん。

山畑：水やりは俺のおかげやで！うち担当やったから。

三木：あれは枯れた！俺がちょっと種をダメにして。(笑)五日ぐらい水につけたらなんか腐っちゃった。

前田：勉強ですね。

三木：勉強。お前（山畑）のおかげや。お前が水やりするから。もうほんまに面積大きいんよ。面積が今一人でもう水やりできやんぐらい。

玉ねぎは四畝。

藤本：そんなにたくさん作ったんや。夢も広がってすごい！

（また話はたまり場の話へ戻り）

藤本：たまり場では、堅苦しい相談とかじゃなくって、雑談の中でこんなことあんのよとかっていうふうな聞いたりして、結構ね。

前田：みんなで考えてくれたりとか。

藤本：一对一の相談ではなく、みんなでこんなことがあって困った、悩んだって言ってたら知らん間にこう何人かで聞いてくれたりしてるよな。

前田：「私だけではないんだな」と発見したことがありました。

藤本：この人の話を聞きましょう。とかじゃなくって、自然と悩みを出せるわな。

三木：僕が聞いて思うのは、程度の問題は違うけど、「悩みは同じやな」と思う。昔僕が悩んでたようなことを、若い参加者が今悩んでたりする。でもよく考えたら20代くらいの時、同じこと思ってたかとか思うわけですよ。だからみんな心広くなっていくと思うんです。伸びしろがあると思うんですよ。山畑さんがクワの使い方もうまくなったように、心も広がっていくんじゃないですかね。（笑）こういうたまり場っていう場所がないと、そういう気づきはなかった。

藤本：素晴らしい！

藤本：あの作業所だったりとか、仕事場ではなかなかそういう話もできへんけど、この雰囲気やから話できる。いろんなところから集まってるからとか、年齢層もいろいろやから話できる。そういう相談もできる場所になってるんかなっていうのもあると思う。

三木：今でこそ余裕を持てていられるけど。

藤本：なんか50代、60代の発言みたいな、今の。（笑）

三木：俺また悩んでることもあるけど、また。上の人に聞いてもらえますもん。僕が結構年齢が真ん中ぐらいだし。

藤本：私らを含めたらな。（笑）

三木：そうそう。（笑）そうだから僕も誰かに聞いてもらおうと思ったし。

藤本：あー、話したことあるよなー。私らもな。いいよな。

職員（尾方）：最後に、新解さん。今日は参加されてみていかがでしたか？なんかこんなに長時間熱心に話を聞いてくださる行政の人もありいいので、嬉しかったです。

新解：私、人見知りなんですよ。

藤本：えー！一度も感じたことなかったな。

新解：まず新しい環境に入っていくのがしんどいんですよ。でも滑り出したらいくらでもお話しできるんです。（笑）

三木：僕らも人見知りやからな。（笑）

一同：大笑！

藤本：そういうことにしとか。（笑）

新解：こういう存在の場所というのがあるってわかってよかったです。

令和七年度より「こどものこころの診療ネットワーク事業」を、様々なこどものこころの問題に向き合うために実施しています。子供さんのことを勉強しながら、第三の居場所作りなんかも勉強しています。

学校が終わった後、家に帰る前に一度そこに立ち寄り、食事をしてお風呂に入るといようなことを支援している事業です。泊まることはできないのですが、日本財団が助成金を交付して行っていました、国も大事な事業ということで、行政が財団のあとにお金を出す事業が始まったんです。たまり場は率先してやっている感じだと思いました。

藤本：仕事帰りに立ち寄って、また元気になって帰って。たまり場と同じ感じやな。

新解：それを子供のころからやるっていうのは大事だなと。市町村がバックアップしていかないといけないのですが。

三木：いいわな。

藤本：紀の川市にもできたらいいのになあ。

新解：みんなでしんどい気持ちを分かちあえる場所があるのはとてもいいことだと思いました。事業所の忙しい仕事が終わったあとに来られる場所があるのはいいですね。事業所の中には、それぞれの人の持っている力をしっかり見ていない事業所もあるかもしれません。今日みなさんと話をするにつれ、いろいろな気持ちを発言してくれて、事業所の様子がよくわかりました。

藤本：そんな関心持ってくれて、嬉しいです。それぞれの意見をしっかり聞いてくださる県の職員さんって素晴らしいです！

新解：数年前に、「ゆめやり取扱説明書」を成果物で作られていたと思いますが、あれにすごく感動しました。

藤本：そうなんですか！

新解：送ってきてもらって。ウクレレの演奏を聞きたいな、行きたいなと思いながら、時間がなく来れなかったのですが。すごい演奏上手そうですね。

三木：今日はウクレレ持ってこなかったな。(笑) 油断した。簡単やよ。

藤本：ウクレレは簡単やっていうけど、私にとってはすごく難しいんでね。買うたものの、飾ってあるんですね。(笑)

新解：ギターにも挑戦したけれど、難しかった覚えがあります。手が小さいのでFコードは無理でした。(笑)

三木：Fは無理！

三木：ギターを挑戦されたなら、ウクレレなんかすぐできる！

藤本：私なんかはもう全然あかんけど、簡単には簡単やっていって。で、それでも難しくてね。一応飾ってる。(笑)

三木：いつか弾きましょう！

藤本：新解さんに教えてあげてよ。

三木：和歌山生活支援センターと第二こじか園からもクリスマス会で演奏してほしいといわれていて、嬉しいな。

前田：すごいなあ。

藤本：もうなんかすごい話やんな。こんなことになって。でも呼んでももらえるだけの实力はやっぱりあるわ。

尾方：県の出張まなび講座にゆめやりウクレレ講座を登録させてもらっています。

新解：ありがとうございます。でも一つ残念だなと思っていることがあるんです。出張まなび講座は教育委員会の事業じゃないですか。ちょっと自分も申し訳ないと思いながら、障害福祉課では浸透していないんです。教育と福祉とを結ぼうっていう取り組みをすごいと思っています。あと、来年度に向けて生涯学習課から会議に呼んでももらっていて、楽しみにしています。

藤本：そんなこと思ってくれるっていうこと自体がすごい嬉しい。わざわざ来てくれてよ。

三木：あと思うけど、対象が障害のある人とかない人とか言ってるけれど、結局やることと同じで。別に障害があるからないからって、教え方変えるわけじゃない。ピアノの先生も言うてたけど。生涯学習とか福祉とか関係ないと思う。

藤本：だから、一緒にやったり、むしろ一緒にやりましょうよ。ということやね。

三木：そうそうそう。

藤本：ほんま。そうやん。

前田：今料理教室もね、一緒にやってますよね。そういう感じよなあ。

藤本：分けする必要があるわけでもなく。

三木：まあでも障害がある人も対象ですよって書かないと障害のある人が参加しにくいかも。全然対象じゃないと思ってしまってるからっていうのが、ちょっとあるかもしれないので。それはどっちも大丈夫っていうふうに当事者側の意識の問題かもしれないな。障害のある人って書いてあったから来ましたっていう人もいたんですよ。

新解：障害福祉課でも出前講座をやっているんです。今後コラボしていけたらいいなと県で検討しているところです。

三木：そんな声を上げてくれていると聞いただけでも嬉しいです。

藤本：ありがたいで。そういう風に考えてもらえば、嬉しいわな。

三木：そうそう 明日、漫画講座があるんや。そのあとにコンファレンスが22日。でも、我々が総合司会をします！

藤本：紀の川市で応援してるわな。(笑)

三木：総合司会の人（山畑さんへ）、最後になにかありますか？

山畑：田辺スポーツパークでやるんだけど。その我々だけじゃなくて、ヤング（漫才師）さんの二人に教えてもらおう！

三木：わかった。わかった。明日の漫才講座でちゃんと練習して、本番頑張ろう！

三木・山畑：オー！！

座談会に参加いただき、ありがとうございました！



連携協議会委員からのメッセージ

社会福祉法人 和歌山つくし会 地域在宅支援センター	飯塚 忠史さん
きのかわ福祉会 シャイニング支援員	小林 正尚さん
紀の川市教育委員会生涯学習課課長	小西 晴久さん
那賀青年学級 (岩出市・紀の川市) 副代表	世儀 景子さん
NPO 法人よりみち理事長・麦の郷相談役	田中 秀樹さん
和歌山県教育庁学校教育局特別支援教育課長	津村 孝幸さん
和歌山県教育庁生涯学習局生涯学習課長	西川 展子さん
紀の川市障害福祉課次長 兼 課長	山田 ゆかりさん (50 音順)
まとめ	
点と線から面へ ～8年の歩みと伴走して(素描)～ 和歌山大学名誉教授、わかやま社会経済研究所・研究員	堀内 秀雄さん

ゆめ・やりたいこと実現センターの活動に参加して

社会福祉法人 和歌山つくし会 地域在宅支援センター 飯塚 忠史

私がゆめ・やりたいこと実現センター(通称「ゆめやり」)の会議に参加したのは2020年6月ごろからでした。障がい者の生涯学習という分野が私の仕事と関連するだけでなく、活動が面白そうだというのが、参加の最初の動機だったような気がします。その後、もっとも興味のあった「やりたいこと講座」や「夕刻のたまり場」へは参加できずにおり、不熱心な参加者であったことを打ち明けなければなりません。しかし不熱心な私を運営委員(連携協議会委員)にいただき、「ゆめやり」の活動を横から見学させていただきました。

改めてこの5年間で何を学んだか振り返ると、1つは運営委員の多様性でした。最も重要な障害の当事者の他、教育の専門家(大学教授・支援学校教員等)、関連の行政職員(県・市)、施設職員(入所施設)等、普通では話の聞けない多職種のメンバーです。会議の進め方は丁度私たちがしているダイアログ形式の多職種連携会議ようです。聞いていて非常に役立つ会議です。次いで障害のある人が自分のやりたいことを自己決定する上で、選択肢がたくさんあることが大切であることを学びました。「やりたいこと講座」の内容が多種に渡っていることがすばらしいと思います。与えられたものではなく、いろいろなことを経験する中で自分のやりたいことが分かってくるのでしょう。

さて、私の所属する重症心身障害児者施設で「ゆめやり」で学んだことを生かせるか、考えています。私の施設では遷延性意識障害の利用者さんも入所しています。彼らは快・不快を心拍数の変化や細かな身体の動きで教えてくれます。寝たきりの子ども達にもいろいろなことを経験してもらい、身体の小さな変化で心の動きを察知し、彼らの「ゆめやり」を実現して行こうとしています。

また私の施設には児童発達支援事業(ディ)がありますが、障がいをもった児童はいろいろな経験をする機会が少なく、2024年から和歌山県教育委員会主催の出張まなびの出前講座(障害者のための生涯学習支援者派遣事業)を利用し始めました。子ども達がいろいろな楽器の音を聞いたり、博物館の展示物を触ったりする経験の中で、自分の好きなことがわかって来るか楽しみです。

最後に私の施設では、年に1回多くの障害者施設や事業所等が参加して「スペシャル・コンサート」を行っています。100人ほどしか入れないエントランスホールに参加者が溢れるほど集まって、日ごろ練習している出し物を披露しています。「ゆめやり」からは最近ウクレレ演奏集団が参加します。障がいがあってもなくても、皆が楽しく参加し、楽しんでいます。互いの技術と日ごろの努力を讃えています。

最近「ゆめやり」が公民館を利用しての活動が広がっていると聞いております。「ゆめやり」の実践上の工夫が効いているのだと思います。私のような障害児者入所施設にも障がい者の生涯活動が広がっています。

いそがず、あわてず、ゆっくり、じっくりと

きのかわ福祉会 シャイニング支援員・連絡協議会委員

小林 正尚

本事業が始まって8年、ゆめ・やりたいこと実現センターの活動は、障害を持つ人たちにとって自分らしさを出せる場となっていると思います

障害のある人たちが、社会の一員としてどんな生活をしていくか？ 支援を受けながらも、自分らしく生活していけるのか？その課題がゆめ・やりたいこと実現センターの活動を通して、今まで外に向かう機会が少なかった中で、多くの講座、また「たまり場」という場所ができたことは、自分を高めたり、自分の思いを持ち、一人の人間として幅を広げることができているのではないかと感じています。

また多種多様の講座は、経験したことがあるけどもう一度やってみよう、この講座は何なんだろうという思いを持って参加し、できる喜び、できた達成感を得て、さらに自分の幅をひろげていっているのではないのでしょうか。加えて、仲間意識も育ち、そこから更なるつながりが生まれ、経験も多岐に渡って生きる力が膨らんでいるのではないのでしょうか。

我が事業の利用者も、「たまり場」が楽しみとなり、「今日、たまり場」と朝から気持ちが高まって自ら参加する気持ちが膨らんで行っています。「たまり場」という場所が生活の一部となっていることがうれしく思います。そこから自分の生活を、自分らしく広がってってもらいたいと期待します。そして、これらの活動が就労した後も、ゆめ・やりたいこと実現センターの活動が生活の一部となって広がって、活動が継続して、生涯の学習につながってほしいと思います。

みんなが、「いそがず、あわてず、ゆっくり、じっくりと」、仲間とともに自分らしさを求めて、充実した生活が送れることを、さらに期待したいと思います。

みんなの学びを支える公民館

～誰ひとり取り残さない生涯学習の取組～

和歌山県紀の川市教育委員会生涯学習課長
(社会教育主事) 小西 晴久

1. はじめに

すべての人には、生涯を通して学び、成長する権利がある。しかし、障害のある方の学ぶ機会や場として、限られているのが現状である。そこで私たちには、公民館が地域に根ざした場として、誰もが学べる環境づくりと魅力的な公民館づくりを目指していた。

2. 取組の背景

公民館の役割って何やらな～？

この思いは、私が生涯学習課に配属され、数年が経過したときに感じた単純な疑問だった。

それまで、私に与えられた担当は、青少年教育や施設管理などが主な業務で、「公民館」という言葉は、普段何気なしによく使っていたものの、「公民館」の役割のことを真剣に考えたのは、恥ずかしながら数年が経過してからのことだった。

3. 公民館の主な役割

①生涯学習の推進

- ・子どもから高齢者まで、年齢や立場を問わず、学びの機会を提供
- ・趣味・教養・健康・福祉・地域課題など、多様な講座や学習会を開催
- ・障害のある方、高齢者、日本語が不自由な人などにも学びの場を提供する

★生涯を通じた学びの「場」づくり

②地域住民の交流の場

- ・世代を超えた交流（子供・大人・高齢者など）を通じて住民のつながりを育てる
- ・地域のイベント（夏祭り、文化祭、講演会など）を通じて住民のつながりを育てる

★地域の「居場所」と「絆」を生み出す場

③地域課題の解決に貢献

- ・福祉、防災、子育て、高齢化、孤立などの地域課題に対応した活動を支援
- ・地域住民と一緒に課題を学び、行動に移す“協働の場”となる

★住民とともに「地域をよくする」拠点

④ボランティア・市民活動の支援

- ・ボランティア団体や自主サークルの活動場所として活用
- ・地域の担い手を育成・支援する役割を担う

★地域の“人材育成”と“活動拠点”

⑤防災・緊急時の拠点

- ・災害時には避難所や情報提供の拠点になることもある
- ・平常時から、防災学習や地域の見守り活動などと連携

★「いざ」というときの地域の安心・安全の支え

などとされており、公民館は単なる“学習の場所”ではなく、「地域に暮らすすべての人が、共に学び、つながり、支え合うための拠点」だと考える。地域共生社会を目指す上で、公民館はこれからますます重要な役割を果たすことが期待されている。

4. 現状と課題

近年、教育的機能を有している事業が様々な形態で行われるようになった。趣味や教養のような「生活の充実感を高めるため、広く文化一般についての理解を深めるため」の学習は、各種のカルチャーセンターなどにおいて、また、IT社会に対応する情報通信技術を活用したeラーニングによってできるようになり、職業的能力の養成のような「特定の専門領域（職業）の技術を高めるため」の教育・訓練も企業（事業所）内においてのみならず、各種の職業訓練所や専修学校において、これまで以上に盛んに行われるようになっている。

しかし、趣味や職業にかかわる学習機会が増大し充実したからといって、人々の抱えている課題に対応した学習がすべて行われるようになったわけではない。産業・経済の急激な変化の中で、それぞれの地域は「まちづくりや地域の文化の継承・創造・自然環境の保全、地域に根ざした経済活動の活性化の促進、介護・福祉、男女共同参画などの現代の切実な地域の課題」を抱えている。これからの社会教育は、単に個々の「趣味・教養」を充足させるだけのものに止まらず、「社会を構成する国民として社会に主体的に参加・参画することにより、新しい『公共』を形成するという視点により社会をつくり、社会の活性化を図る」ことを目的とした学習を、より一層重視する必要があることが認識されてきている。新しいコミュニティ形成のための教育・学習が求められており、地域住民の学習拠点としての公民館にとっては、このための「学級・講座」こそが重要である。

5. 誰もが学べる環境づくりへの取組

市教育委員会生涯学習課といたしましても社会的課題とされている障害のある方の生涯学習について、積極的に取り組む必要があると考えていた。幸いなことに、市内には文部科学省の直轄事業を受託し、活動していた「ゆめ・やりたいこと実現センター」があった。つまり、既に土壌が整備されていたという幸運な地域だった。

この「ゆめ・やりたいこと実現センター」のコーディネーターと連携させていただいたことで、翌年の令和4年度、公民館で障害のある方を対象とした講座の開設が実現した。初年度は、地区公民館5館のうち、2館で計6講座の開設だったが、令和7年度では、全地区公民館で16講座の開設に至っている。また、受講者についても、「ゆめ・やりたいこと実現センター」との共同開催ということもあり、受講者募集の際には周知・広報活動で全面的な協力を得ることができ、ほぼ定員に達している状況である。

6. 取組をととした受講者の変化

普段あまり出向くことが少なかった公民館に行く機会が増えることで、慣れた環境から飛び出し、視野が広がるとともに新しい生活感が見出せた。

次に、公民館講座に参加することで、作業所内などの交流が多かった仲間たちが公民館講座に参加することで、参加者同士の交流が生まれ、支援学校時代などの同窓生や幼馴染などと再会を果たすことができた。

次に、「学びたい」、「仲間と楽しく交流したい」という願いが叶うことで、学習、文化、スポーツといった生涯にわたる学習や体験の中から生きがいを見つけ、人とつながり、物事を知りたいという気持ちは行動力や探求心を引き出し、自分の可能性を広げるとともに知的欲求を満たすきっかけになった。

すべてに共通することだが、健常者にとって日常的に体験できることが、障害がある方にとっては、貴重な体験となる。

7. 取組をととした公民館職員の変化

講座を開設したことで、障害のある方との距離が縮まった。また、受講者への理解や意識が高まり、本人の意思を尊重しながら、自然にサポートできるようになってきている。

次に、学校卒業後の学びの支援について、実態や必要性に気づくことで、社会的課題や地域課題についての関心が高まり、より豊かな教育活動の企画提案ができるようになってきている。

実際に令和3年度、社会的課題をテーマにした公民館講座は2講座のみの開設だったが、令和7年度では20講座の開設に至っている。

次に、数年前までは、代り映えない内容のカルチャーセンター的な講座を毎年のように企画していた公民館職員が、社会的課題についての講座開設の必要性を共有し、受講者のニーズを掴み、効果や目的を吟味しながら企画する習慣が身についてきている。

また、障害のある方に新たな居場所を提供できたことで、新しい仲間との出会いや旧友との再会を果たし、一緒に学ぶ喜びを表現している姿を目の当たりにして、「やらされる仕事」から「やる仕事」あるいは、「やりたい仕事」に変わりつつある。

8. 最後に

紀の川市全体の公民館活動の活性化やみんなの学びを支え、誰一人取り残さない生涯学習の推進を図っていた私たちにとって、大変有意義な事業になったことはいうまでもない。単なる教育支援ではなく、人権の問題・社会的包摂の視点が重要で、今後も学びを通じて「社会の一員として、共に生きる」ことが重要である。

八年間の活動の軌跡

世儀景子

「ゆめ、やりたいことセンター」の活動に参加させてもらって八年、那賀青年学級のスタッフとして20余年。学校卒業後の障害のある人達と時には長電話や多くのメールに悩まされながら、私は若いエネルギーと老いへのいたわりをもらいながら、日々をすごしています。

その彼等の中で、気になる仲間のことを通して「ゆめ・やりセンター」の活動を考えたいと思います。I君はJRで100kmを超える距離を毎日休まず通学し、修了式には「この学校に通わせてくれて有りがとう」と、凜とした声で両親に感謝を述べた。専攻科で仲間と青春を謳歌し、主体的に将来を考え、社会へと羽ばたいていった。が突然の家庭の事情で一人暮らしを余儀なくされ、家庭の支援もなくなった。その頃から電話がかかるようになった。仕事の悩みや、実家の事など話し、最後には、「T君やM君はいいなあ。仕事が終わって行くところ有って、悩みも聞いてもらえるし、楽しいこととしてすごせるんやなあ、専攻科の友人もいるし。僕は、誰も友人がおらん。一緒にヤキ肉食べに行く友人が欲しい。菓子は買わん、一人でテレビの前で食べるのは、わびしい」と言う。I君の居場所を紹介するも、仕事が終わって行くと閉まっているのである、「ゆめ、やりセンター」の『夕刻のたまり場』はロマン溢れるネーミングと共にI君にとっては、あこがれの場なのである。このようなところがどの地域でも存在したら、I君からの電話は楽しい体験が聞け、私は電話を楽しみに、待ってるのだが…。そしてI君が長距離通学で通った専攻科や大学が地元があれば仲間関係が広がり、学校卒業後もつながりが次への挑戦へとつながっていき、I君は日々を豊かに生きて楽しめるのだが。

青年学級へ通うKさんは、家庭の事情で、多機能施設で仕事し、ホームで生活している。

私「仕事場で旅行は有る？」 K「ない」

私「ホームでお楽しみ会等有る？」 K「ない」

私「今月の給料はいくらだった？」 K「しらん」

K「とても心と体がしんどくて仕事を休んでいたら、午後から出勤するように言われた」 私「ええ！」

K「お正月二日から仕事した！」 私「ええ！」

K「傘がないから雨の日の外出は無理」 私「ええ！」

「コンビニの半額弁当飽いた。夜ねずみ出てくる」と言う生活環境から出て、衣食住は整ったKさん。しかし日々の生活の中で、ワクワク、ドキドキして待つ行事や、仲間と、とりくみ完成させ、達成感を味わう体験はない、Kさんの心が解放する時は有るのかな？

Kさんや仲間が心豊かに生きられるよう、生涯学習のとりくみをみんなですすめてい

かねばと強く思った。

那賀青年学級は特に目立った変化はないが伊都青年学級との交流が広がり、「読みきかせ」におじゃまして、那賀にはなかった空気に浸ることができた。又伊都青年学級は活動場所として、支援学校が使用できなくなり、困っていたが、妙寺公民館が使用できるようになり、設備も自由に使えるようになり、活動が広がると喜んでいます。「ゆめ・やりセンター」の公民館講座が紀の川市以外の地域にも広がって、障害のある人は新しいことに挑戦できたと喜び、公民館の方は講座活動で公民館が明るくなったと両者が喜びあえているのはうれしいことです。そしてせっかく講座が開かれていても、種々の理由で、そこに参加できない人達には、和歌山県が障害者のための生涯学習支援派遣事業として「出張まなび講座」が開設されたことはステキな発想で、青年学級も依頼できる講座が有れば、仲間と相談して参加したいなぁと思っています。

障害者の生涯学習の広がりを確かなものに

麦の郷 田中秀樹

麦の郷が学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業を受託したのが 8 年前になります。

ゆめ・やりたいこと実現センターとして活動をはじめ、夕刻のたまり場、公民館での講座の広がり、連携会議に集う団体の取り組みの広がりなど、地域での生涯学習のありようが模索されています。

講座やイベントへの参加などへの参加者が増え続けています。また講座などを支援する講師も 200 人をこえています。{詳しくはゆめ・やりたいこと実現センターでの報告で}

この間連携協議会をはじめとした行政、機関、団体と定期的に交流を進められ、紀の川市、岩出市、かつらぎ町では生涯学習にかかわる事業が広がり、和歌山県教育委員会生涯学習課が進める出張講座が反響を呼んでいます。

2018 年 3 月から 1 年間 16 回開かれた「学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議」に参加させていただきました。(詳しい内容は報告書、**障害者の生涯学習の推進方策について**) 会議の中では全国の自治体や障害者団体、企業、福祉団体での障害者への支援活動に驚きました。余暇活動、サークル活動、個人の支援など生涯学習といわずに広がっている実態でした。そこには団体や個人の努力が積み重ねられていました。

文部科学省が「障害者の生涯学習」として位置づけ、議論が始まることは画期的なことと、期待で膨らみました。和歌山でも障害者への文化、スポーツなどの面で幅広く支援活動が取り組まれていて、そこに「生涯学習」としての光が当たることに大きな意義があると思いました。

障害者の生涯学習とは？まだまだ認識が広がっていません。全国・県内には図書館や体育館、公民館などの生涯学習の施設や機関が多くあります。それぞれで年 1, 2 回でも障害者を対象とした事業が開催されれば大きな啓発につながります。

今行われている事業や活動に障害者も自然に参加できるようになれば格段に社会参加が広がります。すでに多くの場で実践されていますが、全国的にいってもまだ限られ特別な例として知られているにすぎません。

学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業は全国で 18 か所から始まり 31 か所に広がって、障害の生涯学習の意義や活動を広げていく大切な事業といえます。今しばらく広がるには時間がかかりますが、その意義が伝わり広がるために何が課題か何が必要とされているのかが少しずつ見えてきているのではないのでしょうか。

そこには専任の常駐した人が地域で活動している人をつなげ励まし、活動が地道に定着することをすすめる。そういう拠点には教育委員会や民間団体などに人材が配置され

ることが当面必要ではないでしょうか。それには国及び都道府県での財政的な支援が位置づけられ、障害者の生涯学習を実施することが必要です。

また、卒業後に限らず幼児期から親子で参加できる活動も広げていく必要があります。生涯学習への参加は親の気持ちが強くはたらいいて消極的なものになりがちで、幼児期から親子で体験することが将来にわたって左右されます。若い親を支える「生涯学習」の場としても意味があります。

一方障害をもつ人にとって参加することに困難を抱えているために、福祉制度や地域の支援の仕組みとともに考えることなしに一部の障害者に限られた参加になるのではと思います。働くことや生活する人たちを支える団体や個人と手を携えていきことが求められています。

障害者の権利条約に「人権をもつ完全かつ平等な社会構成員」「他の人との平等を基礎として」特別なことではなく当たり前のことが謳われています。障害を持った理由のために、働くこと生活することに様々な困難を抱えることになり、そのことによって社会参加が制限されます。その障害による困難、制限は本人の責任ではなく、社会のものです。

健常者といわれる人たちも、人生の途中や高齢期をむかえる中で、すべての人が何らかの障害をもつことになります。その時に気づくのではなく、他人ごとではなくわがごととして考えていくことが、すべての人にやさしい社会の実現につながります。

障害者の生活を支える仕組みや制度の充実も進めながら「障害者の生涯学習」が「生涯学習」へと発展していくことを願います。

ゆめ・やりたいこと実現センターに携わって学んだこと

2022 年度から連携協議会委員として参加させていただいて早 4 年が経過しました。このセンターの取組に私自身も一緒に参加させてもらいながら、障害のあるこどもたちが学校卒業後も学び続け、スポーツや文化活動に積極的に参加したりできる機会をどのように広げていくことができるのか、障害のあるこどもたちの教育を所管する立場で自分自身に問いかける貴重な機会となりました。

障害のある人々の「やりたい」「やってみたい」という願いを形にする。私は、長年にわたるセンターのこうした取組が、障害のある人々の願いを踏まえた多くの選択肢の提供につながるとともに、様々な活動への参加の機会を創出し、生涯にわたって主体的に学び続ける環境づくりに寄与してきたと実感しています。

また、夢や希望を抱き、やってみたいと思うことに挑戦する。興味や関心を育み、得意な面を伸ばしながら自らの生活を豊かなものへとつなげていく。障害のあるなしやその程度にかかわらず、一人一人の意思の表明を丁寧を受け止め、その意向を最大限に尊重する。

センターの取組において大切にされてきたこうした点は、学校教育においても校種を問わずどれも大切に捉えられている点ではありますが、日々の教育活動全体を通じて本当に体现できているかどうか、私たち教育関係者に改めて振り返る機会を与えてくれたと思います。

障害のある人々の生涯学習の機会は、まだまだ少ないのが現状だと認識しています。生涯にわたって学び続けたいと願う障害のある人々がさらに多くなるように、また、自らの学びを深めることができる環境や仕掛けを創出できるように、今後も引き続き、当事者の方々の声にしっかりと耳を傾け、様々な関係機関の方々と手を携え、私なりの役割を担っていきたいと思います。

ゆめ・やりたいこと実現センターと障害のある方の学び

2018年に文部科学省の事業を受託して以来、ゆめ・やりたいこと実現センターは学校卒業後の障害のある方々の居場所を提供するとともに、「やってみたい」という思いを仲間や地域の人々と共に実現する学びの場として、多様な活動を展開してこれられました。和歌山県教育委員会生涯学習課も、連携協議会の一員としてその歩みを見守ってまいりました。

ゆめ・やりたいこと実現センターでは、「支援する・される」という関係ではなく、参加する方々と支援者が“共に”活動することを大切にされてきました。この姿勢が参加者一人ひとりの主体性を尊重し、家族以外の人とのつながりの中で安心できる居場所を生み出しています。また古民家を活用した温かい雰囲気の中で行われる「夕刻のたまり場」や「やりたいこと講座」など、日常的な活動の積み重ねが、参加者の成長や悩みを話せる仲間づくりにつながっています。

こうした地道な取組は、2021年に「障害者の生涯学習支援活動」として文部科学大臣奨励者表彰を受賞するなど、全国的にも高く評価され、県内での障害者の生涯学習を牽引する存在となっています。

県教育委員会でも障害者の生涯学習について推進していくため、2024年からは、「出張まなび講座」を開始しました。その中で、ゆめ・やりたいこと実現センターの皆さまには、講師として登録いただいたり、ほかの講師をご紹介いただいたりと、多くのご協力をいただいています。今後も、こうしたつながりを大切にしながら、県内に障害者の生涯学習の輪を広げていきたいと考えています。

第135回和歌山大学特別支援教育コーディネーターフォーラム及び「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」で、ゆめやりメンバーの皆さんが岡村孝子さんの「夢をあきらめないで」を歌っている姿に大変心を打たれました。この歌が持つ“自分の夢をあきらめずに自分らしく輝く”というメッセージは、ゆめ・やりたいこと実現センターの取組そのものだと感じたからです。誰もが自分らしく輝き、自分の人生の主人公になれるよう願っています。

一人ひとりの「学びたい」「やってみたい」という思いが響き合い、障害の有無を越えて誰もが共に学び、共に生きる社会へ・・・ゆめ・やりたいこと実現センターの皆さまと連携を深めながら、取組を進めてまいりたいと思います。

8年間の活動の軌跡

紀の川市障害福祉課 山田 ゆかり

「ゆめ・やりたいこと実現センター8年間の活動の軌跡」冊子発行、誠におめでとうございます。

これまで、ゆめ・やりたいこと実現センターは、文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業（障害者の移行期の学びのモデル構築）」を受託され、障害のある人たちの生活がワクワク・イキイキする活動を支援されて参りました。障害のある人もない人も一緒に豊かな地域づくりをする手がかりを見つけ、地域とのつながりを深く広げ、地域共生社会の実現に大きく寄与されてこられました。これまでの8年間の活動に、心より深く敬意を表します。

ゆめ・やりたいこと実現センター連携協議会における皆様との出逢いは、私が令和6年4月に紀の川市福祉部障害福祉課長を拝命し、同じく委員として山崎邸を訪れた同年6月のことでした。そこで、私は障害のある人の生涯学習という新たな側面を目の当りにし、新鮮な驚きに包まれたことを鮮明に覚えております。

委員の皆様方はとても熱心に活動され、取り組み内容をお話しされていらっしゃるお顔の表情も生き生きと楽しそうで、いつしか私はお話しに引き込まれておりました。

障害福祉課におきましては、「障害者の自立支援」を基本施策とし、障害がある人の社会情勢の変化、国・県の制度変更、他市町の動向等の現状を知り、施策における課題の解決に取り組んで参りました。時に、取組の状況と今後の方向性を考察しなければなりません。

少子高齢化や高度情報化に加え、自然災害の多発など、障害のある人やその家族を取り巻く環境は大きく変化し、個々の抱える課題も多種多様化してきています。複雑多様化している相談業務に対応するため、適切なケアマネジメントを行い、より専門的な相談支援の実施を図り、相談体制の充実に努める必要があります。障害のある人が地域社会で自立した生活を営めるよう、それぞれの実情に合わせた最適な障害福祉サービスを提供することが当課の業務の一環であるからです。

障害のある人が夢や希望を持って活躍できるような社会を目指す、ゆめ・やりたいこと実現センターのこれまでの素晴らしい活動に、障害福祉課の一職員としてほんの少しでも関わらせていただき、学ばせていただいたことに感謝を申し上げます。

そして、社会全体が多様性を受け入れる環境づくりを進め、すべての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り高めあう地域共生社会の実現に一步ずつでも歩んでいきますように心から願っております。

点と線から面へ ～8年の歩みと伴走して～（素描）

堀内秀雄（和歌山大学名誉教授、わかやま社会経済研究所・研究員）

1 【ゆめ・やり】事業の challenge を当初から supervisor として伴奏する。

2 時代の背景は、国連の「障害者権利条約」を国会批准（2015年）。文科省が生涯学習支援室を設置（2017）。本事業「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」（2019）の創設。障害者青年学級の廃止（1999）以降、画期的な試み。

3 本事業の3つの視点は、①障害者の学び場づくり、②その担い手・支援者の発掘、③行政を含め多様な社会的資源との協働。そして文科省の生涯学習局と和歌山市の社会福祉法人一麦会の「ほっとけやん」精神の出会いと統合の契機となる。

4 生涯学習における学習権とは何か。ユネスコの「学習権宣言」（1985）—「学習権とは、読み書きの権利であり、問い続け、深く考える権利であり、想像し想像する権利であり、自分自身の世界を読み取り、歴史を綴る権利であり、あらゆる教育の手だてを得る権利であり、個人的・集団的力量を発達させる権利である」。【ゆめ・やり】が掲げた目標は、学習権宣言の基本理念と合致する。（詳しくは、尾方レポート等を参照）

5 本事業が受託対象団体に。自治体等だけでなく、社会福祉法人等も明記され、文部科学大臣表彰に選任（2021）の価値も大きい。象徴すべき財産は、自主製作映画『マイペース・マイスペース』（2025）に結実している。

6 されど、問題はこれからだ。【ゆめ・やり】の希望は、未来をもっと豊かに確かにすることだ。8年間の蓄積を質の高い「点と線から面へ」とシステムアップが不可欠だろう。文科省の補助事業が途絶えても、「障害を持つ仲間たち主権のプラットフォーム」を耕し続けよう。支援関係者・近隣自治体・県教委などとネットワークの再構築が課題だ。世界のSDGsが色あせても、障害者の学習権拠点でもある山崎邸から、【①誰ひとり取り残さない、②最も遠くに取り残されている人々にこそ手が届く】という人権尊重の精神を発信してもらいたい。

7 歴史は韻を踏む。罪なき人々が殺され、平和が壊滅寸前の弱肉強食の時代が目前にある。弱肉強食の世界は格差と貧困が拡大し、弱者が排除される社会は悲しい。学習権宣言は、「学習活動はあらゆる教育活動の中心に位置づけられ、人々を、なりゆきまかせの客体から自らの歴史をつくる主体に変えていくものである」。と説く。障害当事者も支援する私たちも、「人間はどう生きるか」が問われている。

最後に、本事業を黒子として支えられたた、事務局の藤本さん・尾方さん・野中さん・田中さんはじめ様々に支援されたみなさまに心より感謝します。

文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業」

『障害者の移行期の学びのモデル構築』

社会福祉法人一麦会 麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター

〒649-6531 和歌山県紀の川市粉河 853-3

TEL/FAX 0736-60-8233

<http://yume-yaritaikoto.jpn.org/>

発行：2026 年 3 月

印刷：麦の郷印刷



